

乳幼児期における健康の涵養：現象学的な考察から

Über die Erziehung Der Gesundheit in der Kleinkindheit: Von der Phänomenologische Betrachtung

キーワード：媒体性、触覚、スキンシップ、アタッチメント

Keywords: Medium, Tastsinn, Hautkontakt (skin-ship), Zuneigung (Attachment)

武藤 伸司

MUTO Shinji

Abstract

In diesem Papier betrachten wir die Gesundheit von Kindern. Die Gesundheit von Kindern wird von der WHO als “Harmonie mit Umweltveränderungen” definiert. So klären wir das Prinzip der Leiblichkeit darüber, wie die Gesundheit von Kindern erzieht werden kann. Darüber hinaus konzentrieren wir uns auf die Bedeutung des Tastsinns. Kinder bilden nach der Weise des Hautkontaktes verschiedene Zuneigungsmuster. Die Gesundheit von Kindern ändert sich mit diesen Zuneigungsmuster. Daher kann gesagt werden, dass die Gesundheit von Kindern davon abhängt, wie der Tastsinn erzieht werden.

はじめに¹

人間は誰もが乳幼児期という特有な生の期間を経験している。人間が成長や老化という肉体的にも精神的にもある一定の変化を有し、それがそうした時間的な存在である以上、その始まりや過去を持つことは自明である。特にその始まりにおける乳幼児期は、人間が「人間として」生きていくことの基盤が形成される時期である²。この基盤としての乳幼児期の体験は、「三つ子の魂百まで」という古くからのことわざを引くまでもなく、その影響を後の人生にまで及ぼす重要なものである。この乳幼児期における体験は、建築に喩えるならば、まさに建造物の基礎に相当する。そうであれば、その時期に関わる親をはじめとした養育者がその工事を手抜きすることはできない。特に、その重要な時期に関わる保育士や幼稚園教諭もそのこと

についての重要性を常に意識する必要があることは、言を俟たない。

以上のことについて、上に挙げた養育者や教育者たちは、子どもたちの成長における広大な可能性の開けに対して、そこで形成される彼らの人格や個性を実現していくために様々に関わっていく。しかしながらそうした関わり以前に、あるいはそれに並行して、その実現の基盤となる「ある条件」が、前提として必然的に要請される。それが「健康」である。

言うまでもなく、しかも乳幼児に限らず、健康状態は人間活動を左右するものであり、それが良好であるようにと、潜在的にも顕在的にも我々は志向し続けている。自明すぎるこの条件だが、しかし健康という現象の定義は、実は非常に難しい。なぜなら、上述のように人間が時間的な存在であることを鑑みれば、その一生における各局面において、その意味が変化する

るからである。単に元気いっぱいという状態が健康であるのか、それとも、消極的な言い方だが、病気やケガがなければ健康であると言えるのか、あるいは一病息災ということもある。この点について、例えば世界保健機関（WHO）によれば、「健康とは、肉体的、精神的、そして社会的に、すべてが満たされた状態にあるということであり、病気がないし虚弱ではないというだけのことではない」⁴と定義されている。この理念に則れば、肉体的状態が良いということだけでは、人間を健康と評価できないということになる。つまり、ここに示された文言に含意されていることを推測するに、肉体はもちろんのこと、精神状態や生きる上での価値観なども健康に含まれるということが言い得るだろう。

では、そうしたWHOの理念に即した人間の健康とは、実際のところどのような状態であり、その状態はどのように形成されるのか。特に後者の「形成」という観点について、子どもの健康の場合は以下のようにWHOが定義する。それは、「子どもの健やかな成長とは、基本として以下のことが重要となる。〔それは、〕いかなる環境の変化においても調和して生きていく能力が成長にとって本質的である」⁵ということである。このことは、子どもの成長がフィジカル的な側面における健康、すなわち医学や生理学、衛生学の知識を得て注意深く実行すればそれで済むということではないと解釈することもできる。もちろんそれも非常に重要である。しかしながらこの定義において、養育者や教育者たちはそれらの知識とともに、メンタル的な側面における健康、すなわちメンタルヘルスや社会的な対処などという意味での「環境変化に調和する能力の涵養」をも志向する必要があるということが読み取れる。特に後者の側面は、乳幼児の教育に関わる養育者や教育者が子どもたちとの生活の中で考慮すべき点であり、そして将来にわたって考慮すべき点であると言えるであろう。

したがって、本論考ではこのメンタル的な面の健康や健全性という観点について、子どもの健康という概念の内実を哲学ないし現象学の理論を用いて考察することとする。それは以下の理由からである。例えば現象学の分野においては、メルロ＝ポンティ

がその観点に対し、ソルボンヌ大学において児童心理学や教育学の知見を用いて考察している⁶。またフッサールにおいても、発生的現象学において乳幼児における意識の構成プロセスを研究している（vgl. HuaXV）。これらのことは乳幼児理解の問題においても用いられている視角である⁷。つまり、発生的現象学は子どもの成長に伴う認知能力や精神性の発達を分析してもいるということであり、具体的には、育成環境、特に母親をはじめとする他者との情動的なコミュニケーションに彼らの精神性が左右されるという点を考察しているのである⁸。こうした研究成果を用いることで、上述した子どもの健康の条件である「環境変化に調和する能力の涵養」について考察する上での、「環境あるいは他者との関わりから精神の健全性を育む」というアイデアが作業仮説的に提出され得る。このアイデアを考察する上で、現象学の観点は有効性を有し、論拠にできると考えられるのである。

以上のことから本論考では現象学を用いて、環境変化への調和という意味での子どもの健康が、いかなる意味で達成されるのかという点を明らかにしたい。そこではまず、1. 養育者や教育者にとってその達成のための条件とはいかなるものであるのか、という点を確認し、2. その条件の下で子どもとどのような関わり合い方をすればそれが達成できるのか、という点を考察する。したがって本論考では、以上の理解の上で志向される子どもの健康に対して、養育者や教育者が理論的かつ実践的にいかなる関わり合い方をする必要があるかという点について、可能的な展望を哲学的な観点から示唆することを目標とする。

1. 子どもの環境変化への調和における諸条件について

a) 根本原理としての「身体の媒体性」

本論考の目的が以上のことであることからして、ここの子どもの健康に関する考察は、フィジカルの面における健康ではなく、感覚や感情といった感性、すなわち広い意味でのメンタルの面における健康とはいかなるものか、という点に焦点を当てることとなる。とは言えしかしながら、人間の身体が精神的かつ物理

的なものである以上、その両義性を同時に語る必要がある⁹。その際、重要な観点となるのは、その両義性の結節点となる「身体感覚の媒体性」である。

この身体感覚の媒体性とはいかなることか。このことは現象学という哲学の分野において、創始者のフッサールから常に研究されてきた観点である。この点について現象学者の新田義弘は、「パースペクティブの世界現出の基礎条件としての視点性は、物の現出を制約する身体の位置に深くかかわっている…(中略)…身体を生きるということは、物が現出することの条件が生きられていることである…(中略)…身体によって現出する周囲世界に、身体が現出物として一緒になって現出するというに、身体の現出条件が機能している」¹⁰と述べている。これはつまり、ごく簡単に換言すれば、意識に物が現出すること、すなわち何らかのことがらを認識することとは、身体を通じて生じるのだ、ということを示している。現象学はもちろん、カントより始まる超越論的哲学は、認識の構造に対し、身体感覚を悟性(論理的な判断)や理性(推論)の素材を得る始まりの地点であるとしている¹¹。これらのことから、人間がものを知る、周囲世界を意識するということは、その間に必ず身体を介さなければならないということが言える。極めて当然のことではあるが、だからこそこの点は根本的な原理とも言える。

したがって新田は、世界(物理的な対象、身体の物理的な側面も含む)と認識(精神的な意識、感覚や思考)の間には、両者の根源である身体が挟み込まれており、かつそれが両項の成立する条件であると述べているのである。これを簡単に図式化すれば、

世界 ← 身体 → 認識

という構図となるだろう。世界とその認識の関係は、身体を媒介にして相関するのである。このことから、身体とそれに伴う感覚は、物理的な世界とその精神的な認識を繋ぐ媒体であると理解することができるのである¹²(付言すると、特に身体の諸器官において生じる感覚(視覚、聴覚、味覚、嗅覚、触覚)は、身体運動の変化(キネステーゼ)と一体となって周囲世界、環境の変化を捉えている¹³と言える。この点については、本論考では前提となるが、紙幅の関係上割愛する)。

この身体の媒体性は、中間項であるがゆえに、世界と認識の両端において相互作用を生じさせる。乳幼児や児童といった子どもの場合で考えれば、両端の項を形成するために、中間項の身体において必要とされる体験として第一義的なものは、まさに「遊び」であると言える。乳幼児理解にこの身体の媒体性、すなわち身体のメディア性の重要性を指摘する矢野智司は、「メディアは、原理的に経験と体験のどちらともかかわりうるものである。経験を生み出す道具から、手段の性格が失われたときには、その道具は行為自体のうちに溶け込み、体験を生起させることになる。道具の使用そのものが喜びを生み出すときには、その活動は「遊び」と呼ばれるだろう」¹⁴と述べている。身体が道具を用いること、そしてまた道具の物的な特徴に従って身体の行為が制限されたり誘導されたりするという相互作用が、まさに身体の媒体性を示すものなのである。子どもの場合において、例えば積み木遊びや言葉遊び、鉄棒やケンケンなどの運動遊びなど、いずれをとっても子どもはその体験に夢中で没入したり、飽きて見向きもしなくなったりと、身体の媒介性を通じて自分と世界を融合させたり乖離させたりする。この相互的に繰り返される志向性の充実と不充実の連続性の中で、自我や他者、世界の認識をそれぞれ作り上げているのである。したがって、子どもたちの志向を触発する道具やルールを含めた全体としての遊びは、彼らの持ち得る自己と世界両方の認識が健全に成長する上で欠かせない条件になると言えるのである。

b) 身体から育つ精神

繰り返すが、こうした身体性の特徴は、大人はもちろんのこと、子どもの成長過程にも大きな影響をもたらす。人間は生まれ落ちてよりすぐに母親をはじめとする養育者の庇護のもとで生活を始めるが、その際に周囲世界をまずもって感覚で捉えはじめる。当然ながら、子どもが、特に乳幼児が世界を思考し、理性的に捉えるということは、経験的にも理論的にもあり得そうにない。この点については周知の通り、ピアジェの児童心理学によれば、そうした高次の論理的な思考は、感覚-運動的な活動を基盤にしている¹⁵、という

ことであり、一般的な理解であると言える。また、心理学者の山口創も、子どもを知的な活動(頭)、情緒的な活動(心)、感覚-運動的な活動(体)と三つのカテゴリーで分けるとすると、体の成長がその他の心や頭の成長の基盤であると主張している¹⁶。

例えば、情動がいかにして育つのかということを考えてみると、情動の基本は快と不快の感覚である¹⁷が、その快と不快は身体的な体験が元となって形成されるということが言える。何かにぶつかって怪我した際の痛み、高熱で苦しむこと、怖い夢を見たときの不安などの不快感と、その不快感で泣き叫んだとき母親が寄り添って手を握り、優しく声をかけてくれることの快さは、全て身体感覚であり、その強度である。またこれら快不快のギャップとそれらの繰り返しという連続性の中で、子どもは子どもなりの経験を紡ぎ、言わば「物語」を作っていく¹⁸。自分の記憶に残る快不快の感覚が、嬉しかった、嫌だったという感情に発展するのである。身体感覚を伴わない感情は存在せず、身体感覚を伴わない感情は生成されない。思考実験的に自分が無痛症であると考えれば、おそらくどんな無茶も可能で、怖いという感情は生じ得ないということは推測できるであろう。上述のカントの議論における、経験の基礎が感覚的な体験であるという点から言っても、同様のことが主張し得るのである。

この点について山口は、「[心]は体験の結果生じるものだと考えれば、[心]を育てるためには、じつはさまざまな体験を豊かに感じとることのできる[体]を育むことが大切だということが分かるだろう」¹⁹と述べている。また、感性豊かな心が生まれれば、好奇心とそれに伴う行動力が発達し、「なぜ」や「どうする」といった自立的な思考が形成されるとも述べている²⁰。例えば、単に計算の練習や英単語の暗記などを課題として訓練した場合、そうした「なぜ」という好奇心から来る興味関心や面白いという情動がなければ、訓練で身についたものは単なる言葉、記号の羅列であって、ものごとの根本や繋がりを見出すための生きた知識にはならないだろう²¹。こうしたことから山口は、「しなやかな感性をもった[心]から[頭]が発達するという順番になるだろう」²²と主張するのである。

以上のことから、山口の主張をまとめると、子どもの

発達とは以下のような構図になる。

体 → 心 → 頭

このような発達の順序は、明確な発育の期間として区切りを入れられるということではないが、しかしこれら三つのカテゴリーは大人のような高次の認識を形成していく上での発生的なプロセスとして主張できる。いずれにせよ、身体における感覚的な体験が情動や知性の基盤となるのであれば、養育者や教育者はこれらの原則を踏まえた上で、子どもたちに接する必要があると言えるだろう。

c) 触覚と身体運動への注目

では、身体の育成が重要であるとした上で、実際に養育者や教育者は何に焦点を当てて子どもたちに接すればよいのか。この点について山口は、「触覚」と「動くこと」の重要性を主張している。

触覚とは、人間の身体が感じ得る基本的な五感のうちの一つであるが、この触覚は、その他の四つの感覚とはかなり趣きの異なる感覚である。視覚、聴覚、味覚、嗅覚は、それぞれ目、耳、舌、鼻といった特殊な受容器官で外界からの刺激を受け取っている。しかし触覚は、そうした専任個別の受容器官を持たず、身体の末梢に散在している受容器官である。この感覚は主に体性感覚と呼ばれる。またさらに、外部からの情報(刺激)を皮膚感覚、内部からの情報は固有感覚(深部感覚)と呼ばれる。特に前者に触覚が位置し、その他に圧覚、痛覚、温度感覚が属する。後者には、筋肉や骨の緊張や弛緩といった、いわゆる力感や運動感覚が相当する²³。

そして、触覚が位置する皮膚感覚や、それに類する固有感覚、体性感覚などは、総じて身体的な運動に深く関係する。例えば、知覚心理学者のジェームズ・J・ギブソンは、対象の形を知覚する際に、掴んだり撫でたり、回転させたり投げたりといった、身体の動きが重要な役割をしているということを指摘している²⁴。これについては、現象学者のメルロ=ポンティも、「身体図式」(自分の身体とそれ以外の対象に対する可動域や輪郭のイメージ)の発生について、身体運動と物体の対象化の関係を指摘している²⁵。特に、メルロ=ポンティの師でもあるフツ

サールにおいて、この触覚にまつわる特質は、「二重感覚 (doppelte Empfindung)」と「局在する感覚 (lokalisierte Empfindung)」ないし「再帰的な感覚 (Empfindnis)」として指摘されている²⁶。触覚は、例えば視覚とは異なり、右手が左手を撫でると、右手には事物 (Ding) としての左手、すなわち客観的な物体としての感覚が生じるが、同時に左手には身体のある一部に局在する内的な感覚も生じている。つまり、触覚の場合は、触れるにしろ触れられるにしろ、一つの身体の中でそれらの異なる意味内容 (ノエマ) が同時に二重に感覚されているのである。この二重に生じる触覚の襞において、すなわち内的で局在的な感覚と外的で事物的な触覚との同等性と差異性を用いて、身体は再帰性を獲得し、「この私の身体の空間的な形」、すなわち身体図式を獲得するのである。こうしたことから、皮膚や筋肉、関節などの「ハプティック系 (haptic system)」が、それらと環境や対象物と接触することによって、自他の認識が形成されることの原理を哲学的に理解することができるのである²⁷。

こうした触覚と身体運動との相関は、何も物体の視覚的な形姿やテクスチャーの認識のみに関わるというわけではない。例えば山口は、紙で鶴を折る方法を「覚える」という経験について、説明書を読むだけの場合と、実際に折ってみる場合とを比較し、以下のように述べる。「前者では二次元の図で折り方を記号のように記憶するだけである。それに対して後者では、自分が鶴を折っていくときの折り紙の手触りや、紙の擦れる音、きれいに折り目をつけるための力の入れ具合などいろいろな感覚が織り交ざって、最終的に折り鶴ができあがる」²⁸。当然のことのように思われるが、しかし、「こうして覚えたときにできる「折り鶴」の概念は、運動感覚をはじめとするさまざまな感覚が複合的に入り混じっているもので、それだけ記憶の構造も多様になるだろう。その結果、その折り方を思い出すときには、指も動きも覚えており、再生しやすくなる」²⁹のである。このことはまさに、スポーツ運動学の金子明友が主張する「身体知」に他ならない³⁰。

金子は、「今ここに居合わせている私の身体がわかり (発生始原の身体知)、私が動くときのコツをつかみ (自我中心化の身体知)、カンを働かせることができる

(情況投射化の身体知) という働き全体」³¹を身体知として定義している。このことはつまり、身体的な行為のコツとカンが、すなわち動きそれ自体が知恵であるということである。意味や概念といった高次の知性は、その形成はもちろん、概念の記憶や操作に対しても、触覚的な身体運動を介した知恵、すなわち身体で得て、身体に蓄積される知恵によってその土台が作られるのである。そしてその後、抽象化されてそれらに「成っていく」のである。このように、金子によって主張された人間の身体運動におけるこの根本的な知恵の獲得は、まさにこれまでの議論と同等のものである。したがって、身体運動と触覚性への視座は、それが子どもの成長の基盤とみなすことについて、正当性を主張し得るのである。

以上のことから、触覚ないし身体運動への注目は、人間的な知恵の獲得を考える上での、敷衍して言うならば子どもたちの人間的な成長への発達を考える上での、原理への注目とも言い得る。知性を未だ持ち得ない乳幼児であるとしても、その身体には知性を得ようとする可能性と能力が備わっているのである。逆に言えば、その可能性と能力を涵養するためには、身体運動や皮膚感覚へのアプローチを重視すればよいということになるだろう。そこで以下から、そうした身体運動や皮膚感覚が子どもの環境変化への調和にどのように関わるのかという点について考察する。

2. 子どもの環境変化への調和を達成する関わり方について

a) スキンシップの重要性

子どもの皮膚感覚へのアプローチが彼らの成長にとって重要となれば、その方法を考えなければならない。そこでまず挙げられることは、子どもへの養育者や教育者の身体同士の接触、すなわちスキンシップである。

では、スキンシップは子どもにどのような影響を与え得るのか。例えば山口は、「身体的虐待を受けた子どもは、情動のコントロールがむずかしく、すぐにキレやすくなったり、他人と肌を触れ合うことを拒絶す

る傾向がある。それに対してネグレクトされた子どもはスキンシップの心地よさを知らないため、対人感情が育たずに、他人と親密な関係を気づくことができなくなる³²と述べている。暴力はスキンシップとは呼べないが、身体の皮膚感覚における過剰な痛みが継続的に感覚されたり、あるいは逆に全く身体的な接触がなく、触覚的な刺激の欠乏が起こったりしても、どちらも今現在の子どもの自身の健康や発達とその子の将来に、良い影響を及ぼすことはないという³³。またこれらのことについて具体的な事例として、虐待された子ども(1~6歳)の発達指数DQ(知能指数IQ)検査や運動、言語、対人関係などの研究を行った永富徹志、東條光彦によれば、被虐待児のそれらの能力が著しく阻害されていると彼らは報告している³⁴。だが他方、彼らの報告によれば、「虐待環境から離脱し、安定環境に保護することにより、発達が促される傾向が多くみられ、通常恒常的とされるDQ(IQ)が、環境により大きく左右されることが示唆された³⁵とも述べられている。つまりそれはどちらの場合においても、幼少期の適切な対人でのスキンシップ³⁶がその後のメンタルヘルス(心の健康)に関わることを意味していると理解することができるだろう。したがって、本論考の主眼(ないしはWHOの子どもの健康についての定義)である、「子どもの環境変化への調和=健康」という構図において、その環境変化の調和が単に物理的な環境だけでなく対人コミュニケーションも含めた変化への調和であるとすれば、このスキンシップの質と量における幼少期の体験は、重要な論点となり得ると言えるのである。

そこで、なぜ物理的な身体接触であるスキンシップが精神的な心の在り方に影響を及ぼし得るのか、という点について考察しよう。この問いについて、メルロ=ポンティは、乳幼児が自分の運動やその感覚を自分のものと認識するだけでなく、外側に存在するもの、すなわち「知覚されようとしている〈他人〉なるもの、もはや自己のうちに閉じこもった一つの心理作用ではなく、一つの行為、世界に対する行動となってきます³⁷と述べている。このことは、フッサールが『デカルト的省察』において「志向的な干渉(ein intentionale Übergreifen)」³⁸と呼ぶものであり、す

なわち「意味の移転(Sinnesübertragung)」³⁹が生じているということである⁴⁰。志向的な意味の干渉や移転が子どもと養育者ないし教育者の間で生じるのであれば、例えば子どもからの感覚や感情が養育者や教育者の方へ移入し、その逆に養育者や教育者の方からも子どもへ、抱いている感覚や感情が伝わることでもある。これについてメルロ=ポンティは、「他人知覚においては、私の身体と他人の身体は対にされ、いわばその二つで一つの行為をなし遂げることになるのです⁴¹と主張する。これがまさに「間身体性」⁴²と呼ばれる現象である。このことは、本論考の健康の涵養という観点から言えば、特に後者のことが重要である。つまり、上述のスキンシップの文脈から言えば、養育者や教育者が、子どもに対して物理的にどんな触れ方をするかという以前に、どんな「気持ち、感情、意図」を抱いて触れるのかというそのレベルで、それが子どもに伝わってしまうということなのである。こうした事実を研究した乳児精神医学のダニエル・スターンは、こうした現象を「情動調律(affect attunement)」と呼んでいる⁴³。

以上のことから、子どもに触れる側がどんな意図で、どんな想いで、どんな仕方でも接触するかによって、それを子どもは敏感に察知し、それどころかその触れる側の想いを共有してしまうということが哲学的に説明できるのである。そしてそうであれば、愛情を持って触れれば愛情を理解する子どもに成長し、憎悪を持って触れれば憎悪を振りまく子どもに成長するということも言い得るだろう。したがって、スキンシップの効果は、子どもの情動形成を左右するほど重要性を持つと原理的に理解できるのである。

b) スキンシップとアタッチメント

このことを根拠にして、本論考の目的である「子どもにおける環境変化への調和」ということを考えてみよう。上述のように、「環境変化」という言葉の規定は、おもちゃや虫、動物に対する力の入れ具合や、気温や体温の上下に対して脱ぎ着するなど、何らかの物体や物理現象に対するフィジカル的な対応力と、人間同士としての、例えば親子関係や友達関係、さらに成長すれば上下関係など、情動交流や会話にお

ける対人コミュニケーションという、社会性に対するメンタル的な対処の二つに分けることができるだろう。そこで、先の「志向的な干渉」という観点から、まずもって後者が問題となるが、子どもに対するこの志向的な干渉の内実は特に、繰り返すが「愛情」でなくてはならない。

なぜスキンシップの志向は愛情でなくてはならないのか。素朴すぎる論点ではあるし、すでに上述の通りではあるが、あえてその理由を問うとすれば、二つの点が挙げられる。一つは、子どもの側の本能的な行動としてアタッチメントの編成があるという点であり、もう一つは、そのアタッチメントの編成のパターンにより、それが社会における振る舞いや自我の自律性や弾力性に影響をもたらすという点である⁴⁴。

アタッチメントとは、一般に「ある特定の対象との間に形成される愛情の絆 (affectional tie)」⁴⁵として定義されるものであり、乳幼児が自分のぬいぐるみやお気に入りのタオルケットなどを常に携行するような現象に対して言われるものである。それは何もものに限らず、母親をはじめとする養育者に対しても見られる。例えば久保田まりは、「乳児は自分のシグナルに対して適切に、かつ一貫して応答してくれるような特定の保育者に選好性 (preference) を示す… (中略) …接触を求める行動や社会的相互作用を求める行動が、一貫して動機づけられた1つの行動システムへと統合され、この行動のシステムは、… (中略) …特定の保育者のまわりに組織化されていく」⁴⁶と述べている。つまり、子どもは自分の要求に対応する人物と、その接触 (直接にしる間接にしる) を通じて「馴染み」の認識を形成するのである。このアタッチメントの組織化としての、馴染みのある人やものとの関係の中で、子どもは外的な環境に対して親和性や疎外性を示していく。

このことについてエインスワースは、特に母親とのアタッチメント編成について三つのタイプを提示している⁴⁷。

- ①安定型…母親が子どもの要求に即座に対応するという育て方をした場合、子どもは不安に陥ることが少なく、情緒が安定し、母親から離れて探

索行動を行うようになる。

- ②アンビバレント型…母親が子どもの要求に消極的な反応を示す育て方をした場合、子どもは母親から離れるだけで強い不安を感じ、探索行動が少なくなる。
- ③回避型…母親が子どもの要求に否定的に反応するような育て方をした場合、子どもは拒否の辛さを回避しようと防衛反応を起し、母親と距離を取ろうとする。

①は、単に子どもが泣いた際にその対応をするということだけではなく、優しく抱きしめたり、撫でてあげたりと、スキンシップが多いことも特徴として挙げられる⁴⁸。しかし、①以外は全てアタッチメント自体がおよそ成立していない。②と③はネグレクト的な傾向が強く、粗雑な対応で、むしろ子どもにとって不快な対応となっている。当然ながらスキンシップも少ないということになる。

こうしたことは、幼少期のアタッチメント行動だけに限ることではなく、その後成人になったときの対人コミュニケーションにも影響する。発達心理学者のシェイヴァーとヘイザンは、成人 (主に大学生) の対人関係における行動の傾向性と乳幼児期のアタッチメントパターンの三つのタイプに注目し、以下のような対応関係を指摘している⁴⁹。

- ①安定型…他者への信頼感が強いいため、容易に親しくなれる。頼り頼られという関係を気楽に捉える。
- ②アンビバレント型…相手の反応に敏感に反応し、不安定になりやすい。他者にのめり込んだり、必要以上に遠ざけたりと、感情の起伏が激しい。
- ③回避型…他者への不信感が強く、親密な関係に不安を抱きやすい。相手の好意を素直に受け取れない。

後者二つの場合は、対人コミュニケーション、いわば他者という最も重要な環境変化への調和に上手く対応できていないということになる。メンタルヘルスにおいて対人関係は最もストレスに関わることであり、

対人コミュニケーションを円滑にし得ないならば、常にストレスにさらされ、心の健康を、そしていずれ体の健康を害することになる。この点について臨床心理学者の藤岡孝志は、虐待を受けた子どもへのケアについて、愛着（アタッチメント）の観点を臨床に用いることが有用であるとして実践している⁵⁰。つまり、親子関係をはじめとするアタッチメントのパターンが成人した後の行動にまで尾を引くとすれば、他者関係についての環境変化への調和の涵養を乳幼児期に目指すことは、養育者や教育者にとって重要な課題になるだろう⁵¹。

以上の考察から、スキンシップとメンタルヘルス（心の健康）と環境変化への調和という三つの概念が関連し合っているということが理解され得る。本論考の目的である子どもの心の健康とは何かということへの理解は、身体の皮膚感覚への愛情を持ったアプローチを通して、様々な環境変化や対人関係に対応し、調和する力を育むことであると主張し得るのである。

おわりに

本論考は、子どもの健康を養育者や教育者が涵養する際に、いかなることが原理となって、その原理に対しどのようなアプローチをするべきかという点を明らかにした。それは、身体の媒体性を起点に身体感覚と運動性、特に触覚に関わる特質を重要視するというものであった。触れ合うという行為の中で相互の身体が志向性を持って関係を結ぶことが、身体のみならず心の健康と、それらの成長後の状態にまで影響を及ぼすものであることから、本論考の主張は再度確認されるべき原理的な条件であると言い得るのである。

しかしながら、本論考では、こうした理解において、実際に養育者や教育者が、子どもに対してどのような関わり方をし、どのような状況を整えればよいのかという点について、具体的に言及していない。その点について、最後にここで可能性の示唆として述べ得ることは、「自然から育てられる触覚の多様性」と「絵本

や音楽から得る触覚」に焦点を当てて、子どもの遊びについての好奇心や興味関心を満たす、ということである。

自然から育てられる触覚の多様性については、ルソーの『エミール』を引き合いに出すまでもなく、一般に認められ得ることであろう。ルソーは、「自然を観察するがいい。そして自然が示してくれる道を行くがいい。自然はたえず子どもに試練をあたえる。あらゆる試練によって子どもの体質をきたえる」⁵²と述べている。もちろん、ここでルソーの述べる自然は、単に自然環境のことだけではなく、物質的な肉体の自然という意味も含まれている。だが、そうした物質的な世界の多様性や複雑性は、例えば草花の形や砂の一粒一粒、風のざわめきや水の冷たさといった、常に変化し一ところに留まることのない、豊かな刺激によって、子どもたちの心に柔軟性や弾力性を与えてくれる。自然は単調な人工物の画一的なおもちゃの何倍かの刺激でもって、子どもの触覚ならびに五感を触発し、彼らの心を世界へと誘うだろう。こうしたことが複雑かつ細やかな情操を育む基礎になることは想像に難くない。

そして、絵本や音楽も子どもの感性を豊かにすることについて言を俟たない。それらは人の手で作り出された人工物であることから、前言を翻すかのように見えるかも知れないが、重要なのは、絵本や音楽で表現される意味、物語の世界であり、それらとともに生きてくれる養育者や教育者の声や息遣い、表情である。それらによって、子どもたちの想像力を「触発（Affektion）」⁵³することが求められるということである。これらは、養育者や教育者の身体が無いところには生じないし、それを体験させなければ子どもは絵本にも音楽にも意味を見出すことはできない。絵本研究の正置智子が絵本によって子どもが「ひとになっていく」⁵⁴様をメルロ＝ポンティ現象学を用いて豊かに、説得力を持って記述している。正置は、絵本に表現される豊かな色彩や形象はもちろん、なにより紡がれた想像的な物語を「絵本を読んでいるおとなが傍らに存在してくれていることで「安心」の場を確保しながら体験することができる。だからといって、この体験が偽物の体験というわけではなく、身体的にも情

動にも起こり、ときにはからだがかが震えたり、大笑いしたり、涙をこぼしたりもする「体験」である⁵⁵と主張する。楽しいお話も怖いお話も、大人がともに絵本の世界と一緒に歩いてくれるからこそ、子どもは人間の感性や知性を獲得できるのである。この指摘は、本論考の主張の凝縮に他ならない。したがって、我々が子どもの健康を求め、願うとき、それは愛情を含む身体接触が実現するものであると言い得るのである。

以上のことは、本研究の今後の目的と課題として、詳細に考察されるべきであるが、これについては別稿に譲ることとする。本論考で確認された健康の涵養における原理的な指摘を軸に、より具体的かつ実践的な研究につなげたい。

*本論は、科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)若手研究(課題番号19K20080)の支援を受けてなされた研究、その成果の一部である。

注

¹ 本論考における「乳幼児期」の範囲は、小学校入学前までの0～6歳を対象とする。この点については、後の議論におけるアタッチメントの概念を考察する際、エインズワース, D. S., 『アタッチメント——情動と対人関係の発達』依田明(監訳)、金子書房、1983年や久保田まり『アタッチメントの研究』川島書店、1995年を根拠としており、これらが乳児期からのアタッチメントの形成について述べているため、乳児も含めた子どもという意味で、「乳幼児」という語を用いることとする。

² 岡本夏木『幼児期——子どもは世界をどうつかむか』岩波書店、2005年、p.2参照。この点について岡本の著書における前提は2～6歳であるが、本論考では注1の観点から乳児にも敷衍してこの主張を解釈した。

³ 以降において本論考では、「養育者や教育者」という表現で、前者について親をはじめとする保護者、後者について保育士や幼稚園教諭などを意味することとする。注1に示した通り、本論考は児童期(就学前)以前の0～6歳を想定しているため、養育と教育同時に担うような大人を前提として論を進める。

⁴ 世界保健機関憲章前文、“Health is a state of

complete physical, mental and social well-being and not merely the absence of disease or infirmity.”を参照。

⁵ 世界保健機関憲章前文、“Healthy development of the child is of basic importance; the ability to live harmoniously in a changing total environment is essential to such development.”を参照。

⁶ この点について、メルロ=ポンティ, M.『大人から見た子ども』滝浦静雄・木田元・鯨岡峻訳、みすず書房、2019年を参照のこと。メルロ=ポンティの幼児に関する論考が一つに収められており、彼の幼児に対する考察が体系的に見渡せる。

⁷ 例えば、矢野智司『幼児理解の現象学』萌文書林、2014年、または正置友子『メルロ=ポンティと子どもと絵本』の現象学』風間書房、2018年などを参照のこと。

⁸ 特にこの点について、山口一郎『人を生かす倫理』知泉書館、2008年、第3部第1章を参照のこと。

⁹ この点について、拙論「間身体性における原交通の考察」『東京女子体育大学・東京女子体育短期大学 紀要』第54号所収、東京女子体育大学・東京女子体育短期大学、2019年、58-60頁を参照のこと。

¹⁰ 新田義弘『世界と生命』青土社、2001年、131頁参照。

¹¹ イマヌエル・カント『純粹理性批判』上、中、原佑訳、平凡社、2005年、「I 超越論的原理論」を参照のこと。特に感覚については、「第一部門 超越論的感性論」を参照のこと。

¹² この身体の媒体性は、感覚の二重性、すなわちキアスムとして、メルロ=ポンティによって分析されている(メルロ=ポンティ, M. 『シーニュ2』竹内芳郎監訳、みすず書房、1970年、14頁参照)。

¹³ この点について、拙著『力動性としての時間意識』知泉書館、2018年、「第五章第二節(3)「自然」の構成に関わる身体性の現象学的な考察」を参照のこと。

¹⁴ 矢野(2014)、57頁参照。

¹⁵ 滝沢武久『ピアジェ理論からみた幼児の発達』幼年教育出版、2007年、57頁参照。

¹⁶ 山口創『子供の「脳」は肌にある』光文社新書、2004年、10-24頁参照。

- 17 この点について、山口創『皮膚感覚の不思議』講談社、2006年、25頁参照。
- 18 この点について、山口(2004)、21頁を参照のこと。
- 19 山口(2004)、21-22頁参照。
- 20 この点について、山口(2004)、23頁を参照のこと。
- 21 この点について、佐伯胖『「学び」の構造』東洋館出版社、1975年、「第二章 二、「わかる」における主観主義」を参照のこと。
- 22 山口(2004)、23頁参照。
- 23 これらの感覚の区分について、山口(2006)、16-17頁を参照のこと。
- 24 Cf. Gibson, J. J., „Observation on active touch.“, *Psychol. Rev.*, 69, 1962. pp. 477-491. このことは、ギブソンがこの論考で「アクティブ・タッチ」と呼んでおり、山口もこのような触覚とその運動感覚の相関的な変化が、対象知覚を形成すると指摘している(山口(2006)、37-41頁を参照のこと)。
- 25 この点について、メルロ=ポンティ, M.『眼と精神』滝浦静雄、木田元訳、みすず書房、1966年、132頁を参照のこと。また、拙論(2019年)、57-65頁を参照のこと。
- 26 Vgl. HuaIV, §36. これらの術語について、後者のEmpfindnisは、邦訳:『イデーII』(II-1)立松弘孝・別所良美訳(II-1)、みすず書房、2001年(第1巻)、223頁(一)に従い、「再帰的感觉」とする。
- 27 この点について、岩村吉晃「タッチの脳メカニズム」『高次機能機能研究』26(3)所収、日本高次脳機能障害学会、2006年、253-260頁を参照のこと。
- 28 山口(2006)、41-42頁参照。
- 29 山口(2006)、42頁参照。
- 30 身体知について、金子明友『身体知の形成』上、明和出版、2005年を参照のこと。
- 31 金子(2005)、2頁参照。
- 32 山口(2006)、205頁参照。
- 33 例えば、大学生の年代(20歳前後)で健常群と心療内科の外来患者群(抑うつや不安の高い患者)を比較した場合、後者は子どもの頃に親からのスキンシップが少なかったという結果が出ている(山口(2006)、206-207頁を参照のこと)。
- 34 この点について、永富徹志、東條光彦「被虐待

児童の心理社会的発達におけるリスクについて——幼児期の発達変化の特徴』『岡山大学教育実践総合センター紀要』第7巻、岡山大学教育実践総合センター、2007年、135-143頁参照のこと。

- 35 永富、東條(2007)、140-141頁参照。
- 36 ここでのスキンシップという語の意味は、広義において養育者との関わり合いということも含み、非物理的な意味での触れ合いということも内実として規定したい。以降本論考では、この語はそうした意味において使用することとする。
- 37 メルロ=ポンティ(2019)、194頁参照。
- 38 Vgl. Husserliana. Bd. I: *Cartesianische Meditationen und Pariser Vorträge*, hrsg. von S. Strasser, 1950., S. 142. (邦訳:『デカルト的省察』浜渦辰二訳、岩波書店、2001年、202頁参照)。
- 39 Vgl. Hua I, S. 143.
- 40 この点について、拙論(2019)を参照のこと。
- 41 メルロ=ポンティ(2019年)、194頁参照。
- 42 この点について、拙論(2019)を参照のこと。
- 43 この点について、スターン, D. N.『乳児の対人世界』小此木啓吾、丸田俊彦監訳、神庭靖子、神庭重信訳、岩崎学術出版社、1989年、第2部第7章を参照のこと。
- 44 これらの点について、久保田(1995年)、2頁を参照のこと。
- 45 久保田(1995年)、1頁参照。
- 46 久保田(1995年)、13頁参照。
- 47 この三つのタイプについて、エインスワース(1983年)を参照のこと。または、山口(2006)を参照のこと。
- 48 この点について、久保田(1995年)、25頁を参照のこと。
- 49 Cf. Shaver, P., & Hazan, C., “Love as attachment.” in Perman & Jones (eds.), *Advances in personal relationships*, vol. 4. Jessical Kingsley Publishers. 1985. あるいは、山口(2006)、49頁を参照のこと。
- 50 この点について、藤岡孝志『愛着臨床と子ども虐待』ミネルヴァ書房、2008年を参照のこと。
- 51 乳幼児の心身の健康関するアタッチメントの普遍的な妥当性について、ビビアン・プライア、ダーニヤ・グ

レイサー『愛着と愛着障害』加藤和生監訳、北大路書房、2008年、第1部第6章を参照のこと。

⁵² ルソー『エミール』上、今野一雄訳、岩波文庫、1962年、52頁参照。

⁵³ この「触発」という語は、現象学における術語であり、無意識的で潜在的な空虚な形態や表象を、意識的で顕在的な表象へと際立たせる際の刺激である。この刺激は、単に身体的な、感覚的な刺激に留まらず、記号や言葉の意味などによっても生じ得る。触発という術語について、vgl. HuaXI, S. 148-151 (邦訳：『受動的総合の分析』山口一郎・田村京子訳、国文社、1997年、215-218頁参照)。

⁵⁴ 正置(2018年)、2頁、15頁参照。

⁵⁵ 正置(2018)、11頁参照。

参考文献

エインスワース, D. S., 『アタッチメント——情動と対人関係の発達』依田明(監訳)、金子書房、1983年。
Gibson, J. J., „Observation on active touch.“, *Psychol. Rev.*, 69, 1962.

Husserl, E. *Husserliana*. Bd. I: *Cartesianische Meditationen und Pariser Vorträge*, hrsg. von S. Strasser, 1950. (邦訳：『デカルトの省察』浜渦辰二訳、岩波書店、2001年)。

——Bd. IV: *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie. Zweites Buch. Phänomenologische Untersuchungen zur Konstitution*, hrsg. von M. Biemel, 1952. (邦訳：『イデーニII』全2冊 (II-1, II-2) 立松弘孝・別所良美訳 (II-1)、立松弘孝・榊原哲也訳 (II-2) みすず書房、2001年(第1巻)、2009年(第2巻))。

——Bd. XI: *Analysen zur passiven Synthesis. Aus Vorlesungs- und Forschungsmanuskripten*. (1918-1926), hrsg. von M. Fleischer, 1966. (邦訳：『受動的総合の分析』山口一郎・田村京子訳、国文社、1997年)。

岩村吉晃「タッチの脳メカニズム」『高次機能機能研究』26(3)所収、日本高次脳機能障害学会、2006年。

金子明友『身体知の形成』上、明和出版、2005年。

カント, イマヌエル『純粹理性批判』上、中、原佑訳、平凡社、2005年。

久保田まり『アタッチメントの研究』川島書店、1995年。

正置友子『メルロ=ポンティと〈子どもと絵本〉の現象学』風間書房、2018年。

メルロ=ポンティ, M. 『眼と精神』滝浦静雄、木田元訳、みすず書房、1966年。

——『シーニユ2』竹内芳郎監訳、みすず書房、1970年。

——『大人から見た子ども』滝浦静雄・木田元・鯨岡峻訳、みすず書房、2019年。

武藤伸司『力動性としての時間意識』知泉書館、2018年。

——「間身体性における原交通の考察」『東京女子体育大学・東京女子体育短期大学 紀要』第54号所収、東京女子体育大学・東京女子体育短期大学、2019年。

永富徹志、東條光彦「被虐待児童の心理社会的発達におけるリスクについて—幼児期の発達変化の特徴」『岡山大学教育実践総合センター紀要』第7巻、岡山大学教育実践総合センター、2007年。
新田義弘『世界と生命』青土社、2001年。

岡本夏木『幼児期——子どもは世界をどうつかむか』岩波書店、2005年。

ルソー『エミール』上、今野一雄訳、岩波文庫、1962年

佐伯胖『「学び」の構造』東洋館出版社、1975年。

Shaver, P., & Hazan, C., “Love as attachment.” in Perman & Jones (eds.), *Advances in personal relationships*, vol. 4. Jessical Kingsley Publishers. 1985.

スターン, D. N. 『乳児の対人世界』小此木啓吾、丸田俊彦監訳、神庭靖子、神庭重信訳、岩崎学術出版社、1989年。

滝沢武久『ピアジェ理論からみた幼児の発達』幼年教育出版、2007年、57頁参照。

山口一郎『人を生かす倫理』知泉書館、2008年。

山口創『子供の「脳」は肌にある』光文社新書、2004年、10-24頁参照。

——『皮膚感覚の不思議』講談社、2006年。

矢野智司『幼児理解の現象学』萌文書林、2014年。
ビビアン・プライア、ダーニヤ・グレイサー『愛着と
愛着障害』加藤和生監訳、北大路書房、2008年。